

毛沢東思想の要諦と限界

——「習近平思想」理解の手がかりとして

諏訪 一幸

毛沢東思想の要諦と限界 ——「習近平思想」理解の手がかりとして

諏訪 一幸

はじめに

2022年12月7日、「国务院应对新型冠状病毒肺炎疫情联防联控机制」（国务院新型冠状病毒肺炎対策チーム。トップは孫春蘭・副総理（当時））は「10条措置」を公布した¹。これは、ダイナミック・ゼロ政策の実質的放棄宣言だったが、一般大衆からみるとあまりにも唐突な決定だった。さらに深刻だったのは、それによって起こるであろう混乱を避けるための対策や措置が何ら用意されていなかったことである。その結果、中国社会は一時的な無政府状態に陥った。

それにも関わらず、大衆の不満が中国共産党（以下、党、共産党とも略称）の統治をゆるがすことはなく、しばらくすると中国社会は曲がりなりにも安定を取り戻した。この時、足を棒にして薬や病院を探し回り、生きる術を手にしようと右往左往する人々の姿は、指導者習近平の目に、一体どう映っていたのだろうか。ウイズ・コロナ政策への急転換が社会混乱をもたらし、それによって人々の不満が爆発し、政権が深刻な打撃を受けるとの危機感はなかったのだろうか。

筆者が思うに、習近平にそのような不安はそもそもなかった。それは、先端技術を駆使した監視社会化の推進による抑圧が効果を発揮していることに加え、レーニン主義的前衛党理論を信奉する社会主義政党やその指導者の理念と実践において、「自らの意思と主体性をもった人民」なるものは

そもそも存在しないからだと筆者は考える。すなわち、中国共産党は、革命の成功と経済大国化の実現をもって（したがって、新型コロナウイルスの世界的流行以降の経済不況は、当然ながら、党統治の不安定化要因である）、「人民」なる正体不明の集団をアブリアリに代表できると政治的に判断し、「自らが展開する政策は論理的に正しく、人民の意志を100%代表している。仮に反対の声が上がった場合、そのような連中は人民ではないのだから敵対矛盾として厳しく対処すればよい」と考えているのではない²。

「習近平は第二の毛沢東」と言われることがある³。確かに、絶対的権力者である点で両者は共通しており、毛沢東を意識した発言がしばしば習近平の口から発せられる。それでは、彼ら二人が目指した/目指す理想的中国像において、果たして一体どのような共通点があるのか。また、習近平は毛沢東の政治思想と手法から何を学び、また、学ばなかったのか。こうした問題意識の下、比較の前提となる毛沢東の実践（主として建国以降）がその後の中国社会にどのような影響をもたらしたのかを、社会主義思想の受容と変容という視点から初歩的に考察するのが本稿の目的である。考察によって明らかになった結論の一部を先取りするならば、毛沢東の政治哲学理解のキーワードは「レーニン」、「矛盾」及び「人民大衆」にあるということだ⁴。筆者は、本稿を踏まえ、次の段階として、習近平の思想と政治にみられる毛沢東思想の影響を明らかにしたいと考えている。

ここで、本論において筆者が用いる「毛沢東思想」について定義しておく。1981年6月の11期6中全会で採択された「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」（以下、歴史決議）によると、毛沢東思想とは「毛沢東同志を主な代表とする中国共産党人がマルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国革命の具体的実践を結び付けたことによる産物」とされているが⁵、本論では「毛沢東思想とは、党が指摘する誤りを含め、基本的には毛沢東自身の思想である」との立場で議論を進める⁶。

1. 開国の祖 — 中国におけるレーニン主義の体现者

16年間にわたって毛沢東の蔵書管理にあたった逢先知によると、「マルクス、エンゲルス、レーニン及びスターリンの著作のなかで、毛沢東はレーニンの著作をとりわけ愛読した。最も多く読み、最も理解に努めたのもおそらくレーニンの著作」であった。また、毛沢東研究の大家であるスチュアート・R・シュラムも、毛沢東の思想形成におけるレーニン（主義）の強い影響をその著書で指摘している⁷。筆者もそのように考える。そこで、毛沢東のレーニン主義受容と実践における積極的側面についてまず考察する。

第一の影響は、揺るぎない階級闘争観である。レーニン曰く、「マルクスの学説の核心は階級闘争にある」⁸。一方の毛沢東は1939年12月、「現段階の中国社会にはどのような階級が存在するのか。地主階級とブルジョアジーの上層部分が中国社会の統治階級である。一方では、プロレタリアート、農民階級、農民以外の様々な小資産階級が存在する。この三つの階級が、今日の中国の最も広い領土における被統治階級である」⁹と、中国社会に生きる人々を統治階級と被統治階級に分けて、階級闘争の必然性と方向性を示した。

毛沢東はこうした階級闘争観をもって中国革命を成功に導いたが、筆者がより重要だと思うのが、成就した革命を社会主義革命とはみなさない二段階論的階級闘争観（二段階論的革命観）の実践である。レーニンによると、「階級を絶滅することは、地主や資本家を駆逐することを意味するだけではない——これを、われわれは比較的たやすくやりとげた——、これはまた、小商品生産者を絶滅することを意味する。だが、彼らを駆逐することはできない、おしつぶすことはできない、彼らと仲よくくらさなければならない。彼らは、非常に長い間の、漸進的な、慎重な組織的活動によって始めて、つくりかえ、再教育することができる（また、そうしなければならぬ）」¹⁰。

ばならない)」のであった¹⁰。毛沢東も、「新民主主義革命は社会主義革命とは異なり、中国における帝国主義と漢奸反動派の統治を転覆させるだけであり、引き続き反帝反封建に参加できる資本主義成分を破壊するものではない。(中略)。中国革命はブルジョアジーの民主主義的性質の革命(新民主主義的革命)とプロレタリアートの社会主義的性質の革命、現段階の革命と将来の革命という二つの任務の革命を含むものである」と¹¹、同様の認識を示している。この二段階革命論は、1953年の過渡期の総路線の提起によって実質的に否定されるが、建国初期までの毛沢東にこうした現実主義者としての一面があったことは間違いない。

第二に、人類の発展史は、「(階級)闘争の絶対視」と通底する「矛盾の動力視」¹²を背景に書き上げられてきたとの認識である。盧溝橋事件直後に書かれた「矛盾論」の中で、毛沢東は、「社会的変化は、主に社会内部矛盾の発展により、すなわち、生産力と生産関係の発展の間の矛盾、階級間の矛盾、新旧間の矛盾、こうした矛盾の発展によってもたらされるもので、これが社会の前進を促し、新旧社会の代謝を促す」と述べている¹³。これは、同論で言及されている「対立物の統一(合同、同一、均衡)は、条件的、一時的、経過的、相対的である。互いに排除しあう対立物の闘争は、発展、運動が、絶対的であるように、絶対的である」というレーニンの主張に触発されたものと思われる¹⁴。中国の対ソ恐怖心を背景に、日中両国は1972年9月、国交を正常化した。その実現のために訪中した田中角栄総理(当時)に対して述べた、「喧嘩はもうすみしましたか。喧嘩は避けられないものです。喧嘩のない世などないのです」との発言は¹⁵、矛盾を動力視する毛沢東の認識(対立→闘争→国交正常化)に基づくものであろう。

第三の点は、レーニンの前衛党理論が継承されていることである¹⁶。「マルクス主義は労働者党の育成を進めることによって、プロレタリアートの前衛を育成する。この前衛は、権力を掌握する能力を備え、また全人民を

社会主義に導き、新たな体制の方向付けと組織化を行う能力を備えていなければならない」とレーニンは言う¹⁷。毛沢東も1962年1月、「プロレタリアートはどのように指導を行うのか。共産党を通じて指導を行うのである。共産党はプロレタリアートの前衛隊である」と、レーニン同様の認識を示している¹⁸。もっとも、ロシア同様、「ブルジョア社会内で成長する、訓練され、教育を受けたプロレタリアート」¹⁹が極めて少数だったことから、毛沢東の革命実践は、そうした発言とは異なる「主として中国共産党指導下での農民ゲリラ戦争」であり、「中国の革命は実質的には農民革命」だった²⁰。新国家建国実現(新民主主義革命の成功)の主たる要因は、導くべき主たる対象を労働者から農民に事実上置き換えるという、中国の実情に基づいた毛沢東の臨機応変な指導にあったといえよう。

ただし、毛沢東は、建国後は文字通り、労働者を中核とした国家建設を行った。上述の通り、毛は農民指導者として革命を成功に導いた。その意味で、農民は重要な存在だったが、それは戦術レベルでの重視であり、究極の革命主体はあくまでも労働者に置かれていた。「農民問題は国民革命の中心的問題であり、農民が立ち上がり国民革命を擁護しなければ、国民革命は成功しない。(中略)。進歩的な労働者階級がとりわけ一切の革命階級の指導者であるが、農民が郷村で立ち上がり、宗法封建的地主階級の特権を打倒しないのであれば、軍閥と帝国主義勢力が根本から倒れることはない」というのが毛沢東の認識だった²¹。

2. レーニン主義の毛沢東的受容とその危険性

上述の通り、毛沢東思想の形成にはレーニン主義が色強く反映されており、その実践もレーニン主義の中国における実践だったと言えよう。もっとも、レーニンがロシア革命後、理論を実践に十分移すことなく亡くなったことから、両者の革命実践を体系的に比較することはできない。しかし、

毛沢東の実践に、レーニン主義の影響を受けつつも独自の受容とそれに基づく実践という側面があることは否定できない。ただし、この毛沢東的受容がその後の国家建設と人々の生活の質向上に寄与することはまれだった。

第一に、矛盾を絶対視するあまり、毛沢東には「矛盾状態（混乱状態）」を放置し、時には自ら生み出す」という衝動が常に存在していた。

シュラムは、毛沢東が建国以降「格闘した諸矛盾」として「プロレタリア政党と農民的基盤、近代化の論理と革命戦争の精神、マルクス主義と中国の伝統、決定論と主観能動性、徳による救済と技術による救済、独裁と大衆的民主」をあげるとともに、「従来は、ダイナミックで創造的な緊張関係として毛沢東の中で共存していた幾つかの対立物が、その晩年には分裂してしまい、その結果として発散された力が、最終的には毛の思想と行動を破壊的な道筋においやった」とした²²。「分裂」した原因については個別に検討する必要があるが、毛沢東を「多元」主義が内包された体制における「孤独な闘う指導者」と位置付けた徳田教之の指摘は参考になろう²³。いずれにしても、本節及び次節で言及する毛沢東の言動には、シュラムの言う通り、一貫性の欠如が看取される。

百家争鳴・百花齊放から反右派闘争に転換する直前の1957年5月、毛沢東は次のような認識を示した。「最近、民主党派や大学の中では、右派の態度が最も堅固で、最も荒れ狂っている。（中略）。現在、右派の攻撃はまだ頂点にまで達しておらず、彼らは喜び興奮している。しかし、党内党外の右派は弁証法を理解していない。物極まれば必ず反す、だ。われわれは彼らをもう少し荒れ狂わせ、頂点まで行かせよう。彼らが荒れ狂えば荒れ狂うほど、我々には有利だ」²⁴。また、1959年のチベット動乱鎮圧1カ月前にも、毛沢東は同様の認識を示した。「チベットは乱れれば乱れるほどよい。軍隊を鍛えられるし、大衆を鍛えることもできる。また、今後反乱

を鎮圧し、改革を実施するための十分な理由を与えてくれる」²⁵。自らの政策を進めるためであれば、深刻な社会的混乱を放置するのは正当な行為、甚だしきに至っては、文革のように、自ら混乱を惹起することすら当然の行為であって、物的、人的被害を避けるなどは、暴力革命論者である毛沢東には検討に値しなかったのである。

第二に、その言質と異なり、毛沢東の矛盾論実践には「止揚」の重要性認識が後景に退き、混乱だけが残ってしまった²⁶。毛沢東は、前述の通り、矛盾の存在と発展が「社会の前進」を促す点を指摘している。また、「突破を恐れることなく矛盾を出せ。永遠に太平無事であろうとすれば、必ず誤ちをおかす。突破した上で、また新たなバランスを求めるところこそが、弁証法である」と、「新たなバランス」出現の必要性を説く²⁷。しかし、その実践はどうだったのか。高級合作社からの一大飛躍とされた人民公社だったが、実態と乖離した指導によって、中国農村は危機的状況に陥った。その後の経済調整政策で飢餓状態に終止符は打たれたものの、毛沢東は結局のところ、急進政策の失敗を認めることも、人民公社の先に生まれるであろう中国農村の新たな地平を提示することもなかった。また、「国家官僚機構の破壊と修正主義者とされた人物の粛清」²⁸が終わったにもかかわらず、毛沢東は文革收拾のために指導力を発揮しなかったため — せいぜいのところ、社会秩序維持のための解放軍動員 — 、混乱はその後も長く続いた。毛においては、「矛盾」の重要度が「安定」を圧倒していたのである²⁹。

第三に、階級闘争を絶対視した結果としての「永続革命」、これは毛沢東にとって目的そのものだった。「マルクス・レーニン主義の基本思想は革命をやろうとすること」であり³⁰、「われわれは永続革命論者」である³¹とする毛沢東によると、「共産主義への移行は、むしろある階級が他の階級をくつがえすものではないが、これを社会革命ではないとはいえない。

というのは、ある生産関係が他の生産関係に代替するのは、質的飛躍であり、革命であるからだ。(中略)。社会主義の労働に応じる分配から共産主義の必要に応じる分配への転化も、生産関係の面における革命でないとはいえない³²。さらには、「資本主義は社会主義に進み、社会主義は共産主義に進む。共産主義社会もやはり転化するのであり、始めがあり終わりがあるものであり、きっと、階級にわかれるのであろう」とまで言っている³³。共産主義社会における階級発生の可能性を指摘し、その消滅のための革命を展望する毛沢東は晩年の20年間、まさに職業革命家としての本領を発揮し、数々の社会的混乱や動乱を繰り返し主導した。

第四に、党内闘争の必然視が粛清をもたらした。それは、毛沢東がレーニンから受容、形成した矛盾論には人間不信につながる土壌があったからだ。毛沢東は、「あやまりを犯すのは、正しい路線の形成に必要な条件である。正しい路線とは誤った路線とくらべて言うのであり、両者是对立の統一である。正しい路線は誤った路線との闘争のなかで形成されるのである」と述べ³⁴、「誤り」の存在を前提視している。「党内の異なる思想の対立と闘争は常に起こるものであり、これは社会の階級矛盾と新旧事物間の矛盾の党内における反映である。もし、矛盾と矛盾解決のための思想闘争が党内に存在しないのであれば、党の生命は停止してしまう」とも主張した³⁵。すなわち、毛沢東にとって、党内には常に「敵」が存在していることが当然かつ正常なのであり³⁶、思想闘争或いは強権発動によってそれを排除することが党の生命維持のためには死活的に重要なだった。延安時代から繰り返される異端者や政敵(王実味、高崗、彭德懷、劉少奇等)の排除は、毛沢東にとっては、いわばルーティーンワークだったのかも知れない。

ところで、毛沢東とスターリンという二人の社会主義指導者には「粛清者」とのイメージがつきまとうが、理論面と実態面で両者にはどのような

違いがあったのだろうか。菊地昌典によると、スターリンは、「搾取階級の消滅の結果として誕生した友好的な労働者と農民の二階級＝全人民に敵対する、階級基盤をもたない非国民分子」を「人民の敵」と定義し、大粛清を行ったとする³⁷。つまり、スターリンは、粛清されるのは他でもない「人民」の敵であるとして、処刑という行為に大衆の裏付けを与え、これを正当化した。また、スターリンは、主な粛清対象者を自ら決定した。これに対し、毛沢東の粛清は、永続革命論や階級闘争絶対視の延長線上にあったと筆者は考える。また、粛清とはいっても、政敵の肉体的生命を奪うのではなく政治生命を奪うことに重点が置かれた。しかし、自らの政治思想が惹起した悲惨な社会状況を長期にわたって放置したことに鑑みれば、スターリンの粛清にみられる「おぞましき」の欠如を理由に、その残忍さを過小評価することはできない。

第五の特徴は、前衛党理論の必然的帰結とも言うべき個人崇拜の肯定である。毛は1962年においても、「工業・農業・軍隊・学校(文化教育)・商業・政府・党の7つの面で、党はすべてを指導する」と述べていたが³⁸、すべてを指導できるような無謬政党のリーダーに誤りがあるはずもない。毛沢東は党も誤りを犯すとの認識も示しているが、この認識は「正しい路線は誤った路線との闘争のなかで形成されるのである」とのロジックで³⁹、誤りの存在をむしろ肯定していた。個人の誤りも、そのように認識していたのであろう。しかも、毛沢東の場合、開国の祖として、個人独裁につながる危険性が建国時から存在していた。それどころか1958年3月、毛沢東は、微妙な言い回しではあるが、「正しい個人崇拜」なるものを肯定し、自らをその対象とすることは問題ないかの発言をしている。「個人崇拜には二種類あり、その一つは正しいものであり、たとえば、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの正しいものについては、われわれは崇拜しなければならない、永遠に崇拜しなければならない。(中略)。もう一つの崇拜はあ

やまった崇拜である。(中略)。個人崇拜反対の目的にも二種類ある。その一つはあやまった崇拜に反対することであり、もう一つはほかの人を崇拜することに反対し、自分を崇拜するよう求めることである。問題は個人崇拜にあるのではなく、真理があるか否かにある。真理であるなら崇拜しなければならず、真理でないなら、たとえ集団指導であってもやはり崇拜してはいけない」⁴⁰。文革期、毛沢東の神格化が頂点に達したことについては多言を要しないであろう。

歴史は大躍進、人民公社という壮大な試みがたいなる失敗であり、中国農村と農民に計り知れない犠牲をもたらしたことを明らかにしている。これは、農村軽視思想の結果、農村が毛沢東の目指す永久革命の実験地となったからであると筆者は考える。究極的な「農村と農民の軽視」、これが第七の危険性である。「ある同志たちは、急に農民を高くもち上げ、農民が第一で労働者が第二だと考えている。はなはだしきは、農民が労働者階級よりも優れており、農民が兄貴分だと言う」という1958年11月の発言が象徴している⁴¹。

「15年後には鉄鋼生産でイギリスを超える」とする毛沢東の唐突な発言により、農民は、何らの知識もないまま鉄鋼生産に動員され、使い道のない粗鋼を大量生産し、疲弊していった。また、「共産主義への最良の形」とされた人民公社化運動において、虚偽報告を原因とした国家による食糧の大量調達と、公共食堂において好きなだけ食べることを許された農民が食糧を食べ尽くしたことで、農村を中心に最大で4000万人とも言われる「正常ではない人口減少」、すなわち餓死者を生み出した。さらに、文革初期の紅衛兵に対する「下放」命令は体のいい都市防衛策だったと言えるのかもしれない。「思想面で遅れた」学生が学ぶべき対象は、理論的にはプチブル思想を持つ農民ではなく、党の階級基盤たる労働者でなければならないはずだ。しかし、学校が閉鎖され、かと言って定職も持たない血氣盛ん

な若者を留めておくことは、ただでさえ混乱の中にある都市の治安を一層悪化させるおそれがあった。直接の被害者であった学生は勿論のこと、農業に関する知識も、農業経験もない大量の若者を受け入れることになった農村住民の困惑はいかばかりであったろう。

全国農民を指導管理する官製の「中国農会」がないのはなぜなのか。筆者の長年の疑問である。階級基盤である労働者を対象とした中華全国総工会有り、逆に統一戦線工作の対象である私営企業や同企業家を対象とした中華全国工商業聯合会があるのに、である。毛沢東的表現を借りれば、農民の「軽視でもあり重視でもある」ということになろうか。農民主体の革命に成功した中国共産党と毛沢東は、歴代王朝崩壊の一因ともなった農民のチカラ（農民一揆）、その破壊力を身をもって感じているはずだ。労働者と異なり、彼らには微々たるものではあるが農機具などの私有財産があり、緊急時には自足自給の生活も可能だ。そのような農民を組織化すれば、深刻な天災や政策の失敗が発生した場合、強力なリーダー（個人或いは組織）の下、彼らは共産党政権に反旗を翻すのではないか。そのような事態を招かないため、党は今に至るも、あえて全国農民の組織化を避けているように思われる。他者が自身と類似の行動に出ることを党は心底恐れているのである⁴²。

第八に、外交面で「深刻な内政干渉」につながる可能性である。国家の歴史的役割と意義に関してレーニンとは、「マルクスによれば、国家とは階級支配の機関、すなわちある階級が他の階級を抑圧するための機関」であるとした⁴³。毛沢東も、「マルクス・エンゲルスは、いつも『国家とは敵対する階級を鎮圧する暴力機関である』と言っている」と⁴⁴、同様の認識を示している。そして、毛沢東はさらに一歩進んで、次のようにも考えていた。「国家の性質は敵対勢力を抑圧する機関であり、国内で抑圧を必要とする敵対勢力がなくなったとしても、国外の敵対勢力に対する国家の抑圧の性

質は変わらない。国家の形態というのは、軍隊・監獄・逮捕・殺人などにほかならず、帝国主義が存在する限り、国家のこの形態は共産主義になっても変わらないのではないか？」⁴⁵。つまり、全世界共産主義化が実現するまでは、資本主義国家（レーニンによれば、帝国主義は資本主義の最終的発展段階である）に対する敵対認識に変化はないことになる。平和共存五原則の旗を掲げる一方で、中国外交には「敵」の存在を前提とした統一戦線の思考様式（例えば、中間地帯論、三つの世界論）も色濃い。文革初期の造反外交の展開や改革開放期に入ってから、少なくとも1980年代までは続いた国外反政府勢力への武器供与（例えば、ミャンマー）などは⁴⁶、毛のこうした認識の延長線上にあるのではないかと⁴⁷。

3. 毛沢東思想の独自性とそれがもたらした災禍

矛盾論の発想は決して毛沢東の専売特許ではない。しかし、その双子の兄弟ともいえる「実践論」⁴⁸と一体化することでバージョンアップし、やがて毛沢東思想の核心を形成するようになったと筆者は考える。このような毛沢東思想には歴史の進歩を促しうるダイナミズムが看取されるが、その実践は一体何をもたらしたのだろうか。矛盾論に内在する危険性を毛沢東が適切に認識せず、過信、濫用したことを主たる要因として、1950年代後半以降は現実離れした急進的政策が次々と打ち出され、災難と形容されるほどの深刻な打撃を国家と大衆に与えることとなった。以下、その原因となった思想的背景を考えてみたい。

第一に、「上部構造決定論」がある。毛沢東は、早くも「矛盾論」の中で次のように述べている。「生産力と生産関係間の矛盾では、生産力が主である。理論と実践の間の矛盾では、実践が主である。経済的基礎と上部構造間の矛盾では、経済的基礎が主である。それらの地位が転化することはない。これらは機械的唯物論の見方であり、弁証的唯物論の見解ではな

い。（中略）。生産関係、理論、上部構造などは、一定の条件下で、その主な決定的役割を発揮する。この点も認めねばならない。生産関係が変わらないがために、生産力が発展できないときは、生産関係の変更が主たる決定的役割を果たす」⁴⁹。これは、下部構造（生産力）決定論⁵⁰への挑戦と言えよう。そして、この考えを具現化した典型例が人民公社である。1958年8月29日、党中央は、「工業、農業、商業、文化・教育、軍事を互いに結びつけた人民公社をつくること、農民を指導して社会主義建設のテンポをはやめ、予定よりも早く社会主義を完成し、しだいに共産主義へ移行してゆくためぜひとも採用しなければならない基本方針である」と決議した⁵¹。このように、農業生産に限定した高級合作社をあらゆる要素が一体化した人民公社という基層行政単位に改めたのは、生産関係の突破によって生産力の飛躍的發展を狙うという思惑を背景にしたものだったが、その結果がどのようなものであったかは既に指摘したとおりである⁵²。

第二の点は、現在においても党が毛沢東思想の真骨頂とする「大衆路線」（大衆の中から大衆の中へ）に関するものである⁵³。毛沢東は延安時代、「わが党のあらゆる実際の工作において、正確な指導であるためには、必ずや大衆の中から来て、大衆の中に入っていかなければならない」と述べている⁵⁴。中国共産党が中国国民党からの政権奪取に成功した大きな要因が、広範な大衆を味方につけるという意味での大衆路線にあったことは間違いない。しかし、毛沢東がその本心において大衆を信頼していたかは甚だ疑わしい。なぜなら、毛は1958年4月、「根拠地では民主主義を実行したが、第一に、金がなく、第二に、食糧がなく、第三に、鉄砲がなく、第四に、孤立無援だったので、ほかにやりようがなく、大衆に依拠しなければならなかったのだ」⁵⁵とも言っているからだ。中国では種々雑多な基層社会の要望を集約整理し、指導部にフィードバックする有効なシステムが存在せず、また、前衛党と

いう自己規定の必然的結果として、前述のとおり、大衆は結局のところ党によって指導される受け身の存在にすぎないのであった⁵⁶。加えて、「労働者階級、農民階級、都市の小資産階級、帝国主義と国民党反動政権及びそれを代表する官僚資産階級（大資産階級）、そして地主階級によって圧迫され、損害を被る民族資産階級」⁵⁷とされる人民大衆と、その対象外である「非人民大衆」の境界は極めて曖昧なものであり、その範疇に入らない者はしばしば「敵」と認識された。

第二の点と関連するが、第三に、大衆と幹部の間にみられる緊張関係に関する問題がある。中国共産党政権は「幹部群衆」（幹部と大衆）という表現を多用する。これは、通常であれば、指導する側の幹部と指導される側の大衆との調和のとれた関係を意味するが、「大衆路線」の必要性が強調される場合には、非党員たる大衆による党幹部批判、官僚制/官僚主義批判という意味合いが時としてあるように思われる。1956年11月15日、8期2中全会の最終日に総括発言を行った毛沢東は、プロレタリアート指導下の大民主について言及した際、次のように述べている。「大民主は官僚主義者に対しても用いることができる。県委員会レベル以上の幹部は数十万人おり、国家の命運は彼らの手に握られている。もし、（国家運営に関連する事案の）扱いがうまくなく、大衆から離れ、刻苦奮闘しないのなら、労働者、農民、学生には彼らに賛成しない理由がある。我々は警戒せねばならず、官僚主義の作風を助長してはならず、人民から離れた貴族階級となってはならない。もし、官僚主義の誤りを犯し、大衆の抱える問題を解決せず、大衆をののしり、大衆を押さえつけ、こうした作風を改めないのなら、それが誰であろうと、大衆にはこの人物のポストを奪い去る理由がある。免職させるのは良いことであり、そうしなければならない」⁵⁸。奪権闘争として文革を性格づけたとき、毛沢東にとってそれは、政治生命をかけた大衆路線の発露であり、官僚主義批判の実践だったのかもしれない。

い。ただし、この大衆運動は当初から常軌を逸したものであった⁵⁹。

第四に、1960年代以降の毛沢東に色濃い「基層・地方重視」主義が⁶⁰、時として、度を越えた中央集権主義批判につながったことが指摘できる。建国当初はソ連に倣い、毛沢東は中央集権的だった。1953年8月のスピーチでは、同年「3月10日、政府各部門が党中央の指導を離れる危険を回避するため、中央は、政府工作に対する指導強化に関する決定を行った」ことを明らかにしている⁶¹。しかし、フルシチョフによるスターリン批判を受けて行った講話「十大関係を論ず」で、中国独自の道を歩む姿勢を明確化した1956年頃から、毛沢東は次第に基層重視主義、中央集権制（官僚制）批判に舵を切った⁶²。毛沢東によると、「わが国は秦以来大国を形成し、長らく全国をおよそ統一してきたが、欠点の一つは官僚主義で統制がひどすぎ、地方は独立して発展できず、みなが足をひっぱりあったので、経済の発展はおそかった。（中略）。われわれは全国を統一しなければならないが、各省は独立しており、相対的統一・相対的独立」なのであった⁶³。社会主義教育運動から文革初期にかけて、劉少奇や鄧小平らが重用した工作組とその派遣を、官僚主義的で基層の主体性を否定するものとして毛沢東が敵視し、修正を迫ったのがその代表的事例である。

第五に、地方重視の姿勢は時として、「中央の方針に反旗を翻すことを良しとする」かの発言につながっている。毛沢東によると、「地方には、中央の各部が地方にあたえた、通用しない、実際に合致しないすべての主観主義的な命令、指示、訓令、表式をボイコットする権限があり、一部のものについてはもっと強くこれを阻止してもかまわない」のであった⁶⁴。まさに鄧小平時代に突入した時期に当たる1978年12月、安徽省鳳陽県小崗村の農民が憲法の条文（78年憲法第7条）を無視し、個人経営形態の復活で農村復興を実現したことをもって、人民公社に終止符が打たれたのは、基層の主体性を評価する毛沢東的思考の継承事例とも言えよう。

ただし、こうした法治主義をも否定する行動様式が地方の活性化にプラスに働いたのは当然のことながら、例外だった。毛沢東は、「法律に依拠して多数の人を治めてはならない。良い習慣を身につけることに依拠し、多数の人を治めねばならない」と言い⁶⁵、「世の中にある多くの新しく正しいものは、常に違法なものだった。我々はかつて“違法”だった」と認識していた⁶⁶。確かに、国民政府時代に非合法組織として、山岳地帯や農村でゲリラ活動を展開していた中国共産党にとって、法律は守るべきものではなく、破壊すべきものだったに違いない。「既存の秩序（の破壊）から新たな秩序が生まれる」ことは、毛にとって弁証法のロジックに叶うものだった。法律に限らず、制度一般、とりわけ官僚制度が、毛沢東にとっては「破壊のための下地」に過ぎなかったのかも知れない。

毛沢東は1958年8月、「昔の軍隊を動かしていたときには、賃金はなく、日曜日はなく、8時間労働制はなく、上下は一致し、将校と兵士は一致し、軍民は打って一丸となり、何千何万という人を動員した。このような共産主義精神は非常によい」と述べたという⁶⁷。新たな秩序構築のため、既存の秩序を容赦なく破壊することが正義とされた延安時代から新国家建設に至るまでの社会状況こそ、毛沢東にとっての理想郷だったのではないか。1950年代中頃以降の政治的格闘は、そうした理想郷復活のための実践だったようにも思われるが、その結果は人々にとって災難以外の何物でもなかった。

第六に、権限の下放、自力更生、「大にして全、小にして全」などといった考え方に起因する「閉鎖主義や排外主義」の危険性が指摘できる。大躍進と人民公社化という嵐が吹き荒れ始めた1958年8月、毛沢東は次のように述べている。「今後は、各省は皆自分で（食糧と鋼鉄を：筆者）生産し、自分で使い切らなければならない。各省は、別の所へ生産物を売ろうと考えてはならない」⁶⁸。1980年代後半から1990年代前半にかけてしばしば批

判の対象となった「諸侯経済」現象の思想的根拠は、案外このへんにあるのかも知れない。先に指摘した「外交面での内政干渉」とこの「内政面での閉鎖主義」の危険性は、表裏一体化したものとも言えるのではないか。

第七に、客観性を無視した精神主義がある⁶⁹。毛沢東は1959年末から60年初めの時期に、「レーニンは『後進的な国ほど資本主義から社会主義への移行はより困難である』（中略）といったが、これはいまからみると正しくない。実は経済が後進的であるほど、資本主義から社会主義への移行は容易なのであって困難なのではない。人間は貧しければそれだけ革命をやろうとする」と述べている⁷⁰。こうした考えが、いわゆる「主観的能動性」という発想の基礎にあった。その典型が、1958年の鉄鋼（粗鋼）生産目標を前年比で100%、穀物生産を同50%それぞれ引き上げるという到底達成不可能な決定を下したことである。「大胆であるほど、生産量が増える」、「土地の潜在力は無尽蔵で、面積当たりの生産量は努力次第」、「思想を改めさえすれば、雨が降らなくても大增産、日照りでも大豊作」といった当時のスローガンからは、その熱気と同時に、非科学性を垣間見ることができる。なお、上記毛沢東発言は人民公社化路線の修正過程、すなわち経済調整政策への転換が進みつつあった時期になされたものであることから、強い批判を受けてはいるものの、彼の頭の中では、大躍進、人民公社政策はあくまでも正しいものだった。

下記の表は、本論1～3での考察の根拠となった毛沢東の発言と記述を整理したものである。

表 毛沢東の言論			
キーワード	具体的言論	時、出典	特記事項
党	1. (路線の) あやまりはやはりどうしても犯すものであり、犯さないようにするのは不可能である。あやまりを犯すのは、正しい路線の形成に必要な条件である。正しい路線は誤った路線とくらべて言うのであり、両者は対立の統一である。正しい路線は誤った路線との闘争のなかで形成されるのである。 2. 総じていえば、階級闘争の道具としての党と国家は死滅するのである。しかしその歴史的任務が完成しないうちは、それを強化しなければならぬ。 3. 実際に共産党内の二つの階級、二つの路線の闘争は、終始、存在するのであり、なんびともこれを否定しきれないのです。 4. 社会主義革命をするのに、資産階級がどこにいるのかわからない。ほかでもない、党内にいるのだ、党内で資本主義の道を歩む実権派である。	1. 1958年3月20日。『毛沢東思想万歳(上)』、234頁。『建国以来毛沢東文稿 第十二冊』、255頁 2. 1958年12月19日。『毛沢東思想万歳(上)』、361頁 3. 1967年5月1日。『毛沢東思想万歳(下)』、387頁 4. 1975年10月～1976年1月。『建国以来毛沢東文稿 第二十冊』、451頁	1. 「党は誤りを犯す」「誤りあつての正しさ」と認識 2. 死滅前の党と国家を強化 3. 「党内には常に階級闘争が存在する」、従って闘争が必要 4. 「資本主義の道を歩む党内実権派」の存在
国家	1. 階級が消滅すると、階級闘争の道具たる一切のもの、すなわち、政党と国家機関はその役割を終え、必要性がなくなり、徐々に衰え、自らの歴史的使命を終え、さらに高い人類社会に到達する。 2. マルクス・エンゲルスは、いつも「国家とは敵対する階級を鎮圧する暴力機関である」と言っている。 3. 国家の消滅には、なお国際的条件も必要である。 4. 国家の性質は敵対勢力を抑圧する機関であり、国内で抑圧を必要とする敵対勢力がなくなったとしても、国外の敵対勢力に対する国家の抑圧の性質は変わらない。国家の形態というのは、軍隊・監獄・逮捕・殺人などにほかならず、帝国主義が存在する限り、国家のこの形態は共産主義になっても変わらないのではないか?	1. 1949年6月30日。『毛沢東選集 第四巻』、1357頁 2. 1959年12月～1960年2月。『毛沢東 政治経済学を語る』、14頁 3. 同上、115頁 4. 同上	1. 階級の消滅と同時に、党と国家も消滅 2. 『毛沢東文集 第八巻』、103～148頁は『毛沢東 政治経済学を語る』に対応する抜粋 3、4. 国家の性質、消滅と国際環境
党の指導、中央集権	1. 当時(封建時代)は、まだ新しい生産力も新しい生産関係もなく、新しい階級の力もなく、先進的な政党も存在しなかったため、これらの農民蜂起と農民戦争は、今日のプロレタリア階級と共産党が農民蜂起と農民戦争を正確に指導しているようには、先進階級と先進政党の指導をうけることができなかった。こうして、当時の農民革命はすべて失敗におわった。 2. 革命根拠地で行う長期の革命闘争は、主として中国共産党指導下での農民ゲリラ戦争である。 3. 1953年3月10日、政府各部門が党中央の指導を離れる危険を避けるため、中央は政府工作に対する指導強化に関する決定を行った。 4. 工業、農業、商業、学校、軍隊、政府、党の7つの面で、党はすべてを指導する。 5. われわれのスローガンは「プロレタリアートの指導する、労農同盟を基礎とする人民民主独裁」である。プロレタリアートはどのように指導を行うのか。共産党を通じて指導を行うのである。共産党はプロレタリアートの前衛隊である。 6. 共産党は「全人民の党」なのだと主張する人々が一部にはいるが、われわれはそうは考えない。我々の党はプロレタリアートであり、プロレタリアートの先進部隊であり、マルクス・レーニン主義で武装された戦闘部隊である。	1. 1939年12月。『毛沢東選集 第二巻』、588頁。『毛沢東選集 第七巻 延安期Ⅲ』、102頁 2. 同上、598頁。同上、114頁 3. 1953年8月12日。『毛沢東選集 第五巻』、95頁 4. 1962年1月30日。『建国以来毛沢東文稿 第十六冊』、227頁。『毛沢東思想万歳(下)』、32頁 5. 同上、218頁。同上、21頁 6. 同上、230頁。同上、34頁	1. 先進階級と先進政党なくしては成功しない農民革命 2. 毛沢東の理想郷は、党指導下での農民ゲリラ戦? 4. 党が一切を指導(一方で、基層、地方の役割重視。この点が習との違い?) 5. 前衛党思想(『国家と革命』、53頁)

矛盾	1. 事物の矛盾の法則、すなわち、対立物統一の法則は唯物弁証法の最も根本的法則である。 2. 唯物弁証法の宇宙観は、事物の内部から、ある事物の他の事物に対する関係から事物の発展を研究するよう求めるものであり、事物の発展を事物内部の必然的な自己運動と見なす。(中略)。事物発展の根本的原因是、その外部にあるのではなく、その内部にあり、事物内部の矛盾にある。いかなる事物内部にもこのような矛盾性があり、事物の運動と発展を引き起こす。 3. 社会的変化は、主に社会内部矛盾の発展により、すなわち、生産力と生産関係の発展の間の矛盾、階級間の矛盾、新旧間の矛盾、こうした矛盾の発展によってもたらされるもので、これが社会の前進を促し、新旧社会の代謝を促す。 4. 党内の異なる思想の対立と闘争は常に起こるものであり、これは社会の階級矛盾と新旧事物間の矛盾の党内における反映である。もし、矛盾と矛盾解決のための思想闘争が党内に存在しないのであれば、党の生命は停止してしまう。 5. 矛盾は、あらゆる事物の発展過程において存在する。 6. 生産力と生産関係間の矛盾では、生産力が主である。理論と実践の間の矛盾では、実践が主である。経済的基礎と上部構造間の矛盾では、経済的基礎が主である。それらの地位が転化することはない。これらは機械的唯物論の見方であり、弁証的唯物論の見解ではない。(中略)。生産関係、理論、上部構造などは、一定の条件下で、その主な決定的役割を發揮する。この点も認めねばならない。生産関係が変わらないがために、生産力が発展できないときは、生産関係の変更が主たる決定的役割を果たす。 7. 物事は、矛盾する双方が依存しあえば終わりというのではなく、より重要なのは、矛盾する物事が相互に転化するということである。つまり、事物の内部で矛盾しあう双方は、一定の条件下で、それぞれ自分と相反する方面に転化することであり、対立する側の地位に転化するということである。これが矛盾の同一性の第二の意義である。どうしてここに同一性があるのか。統治されているプロレタリア階級は、革命を通じ、統治者になるのである。 8. 突破を恐れることなく矛盾を出せ。(中略)。突破した上で、また新たなバランスを求めるこそが、弁証法である。 9. 我々は、極点に達するまで、もうしばらく彼ら(右派)をたけり狂わせておく必要がある。そうであるほど、我々にとって増々有利になる。(中略)。大量の、反動的な毒気をまき散らす言論をどうして新聞に掲載するのを許すのか。なぜなら、そうすれば、人民はこれらの毒草や毒気を認識することができ、それを除去、消滅しやすくなるからだ。 10. チベットは乱れれば乱れるほどよい。軍隊を鍛えられるし、大衆を鍛えることもできる。また、今後反乱を鎮圧し、改革を実施するための十分な理由を与えてくれる。 11. バランスとバランス欠如というこの矛盾の二つの側面においては、バランス欠如が絶対的で、バランスが相対的なものである。もし、バランスだけ存在し、バランスの欠如がなければ、生産力、生産関係、上部構造に発展はなく、固定化してしまう。矛盾、闘争、分解が絶対的で、統一、一致、団結は相対的で、条件が必要だ。 12. 矛盾がなければ運動がない。社会は常に運動によって発展する。社会主義時代においても、矛盾は依然として社会運動発展の動力である。 13. 以前、弁証法には三大法則があるといわれたが、スターリンは四大法則といった。私の考えでは、ただひとつの基本法則すなわち矛盾の法則があるだけだ。	1. 1937年8月。『毛沢東選集 第一巻』、274頁 2. 同上、276頁 3. 同上、277頁 4. 同上、281頁 5. 同上、283頁 6. 同上、300頁 7. 同上、303頁 8. 1955年12月6日。『毛沢東思想万歳(上)』、50頁 9. 1957年5月15日。『建国以来毛沢東文稿 第一冊』、409～415頁 10. 1959年2月18日。『建国以来毛沢東文稿 第十三冊』、402頁 11. 1959年12月～1960年2月。『毛沢東文集 第八巻』、131頁 12. 同上、133頁 13. 1965年12月21日。『毛沢東思想万歳(下)』、312頁	1. 対立物統一の法則 2. 事物発展の根本原因はその内部矛盾にある 3、8. 止揚の考えあり 4. 党内には常に矛盾が存在し、その解決のための思想闘争を辞めると党の生命は停止 6. 上部構造決定論 9、10. 陰謀論
----	--	---	---

革命、闘争	1. 革命は暴動であり、一つの階級がもう一つの階級を打ち倒す激烈な行動である。農村革命は、農民階級が封建的地主階級の権力をひっくり返す革命である。(中略)。すべての農村を短時間、恐怖が支配する状況に陥れなければならない。これができなければ、農村の反革命派の活動を鎮圧することは決してできず、神権を打倒することも決してできない。 2. 革命戦争のみが階級を消滅でき、階級を消滅することによってはじめて、永遠に戦争を消滅できるというのが歴史の規律である。 3. 共産主義への移行は、むしろある階級が他の階級をくつがえすものではないが、これを社会革命ではないとはいえない。というのは、ある生産関係が他の生産関係に代替するのは、質的飛躍であり・革命であるからだ。(中略)。社会主義の労働に応じる分配から共産主義の必要に応じる分配への転化も、生産関係の面における革命でないとはいえない。 4. 社会主義制度のもとでは戦争はないが、闘争があり・人民内部の各派の闘争がある。社会主義制度のもとではある階級が他の階級をくつがえす革命はないが、革命はある。社会主義から共産主義への移行は革命であり、共産主義のある段階から他の段階への移行も革命であり、そのほか技術革命・文化革命がある。共産主義は必ず多くの段階を経なければならず、多くの革命がありうる。 5. 共産主義になると、生産は高度にオートメ化するため、人間の労働・行動もより正確さが要求され、その労働紀律はいまよりもっときびしくなる。 6. 社会主義という段階は、二つの段階に分けることが可能である。第一段階は発達していない社会主義で、第二段階は比較的発達した社会主義である。 7. マルクス・レーニン主義の基本思想は革命をやらうとすることだ。 8. 中国は平和を愛するという人がありますが、それはホウで、実際は闘うことを好むのです。私もその一人です。戦うことを好めば、修正主義が出現するのは、そんなに容易ではないでしょう。 9. 100年後になっても革命をするのか？ 千年後もやるのか？ やはりやるのである。	1. 1927年3月。『毛沢東選集 第一巻』、17頁 2. 1959年12月～1960年2月。『毛沢東文集 第八巻』、130頁 3. 1959年12月～1960年2月。『毛沢東 政治経済学を語る』、42頁 4. 同上、64頁 5. 同上、116頁 6. 1959年12月～1960年2月。『毛沢東文集 第八巻』、116頁 7. 1964年3月。『毛沢東思想 万歳(下)』、96頁 8. 1967年2月3日。同上、376頁 9. 1975年10月～1976年1月。『建国以来毛沢東文稿 第二十冊』、451頁	1. 革命は暴動(『国家と革命』、45頁) 2. 革命戦争が階級と戦争を消滅 3と4. 社会主義から共産主義への移行も革命(習近平は自我革命) 4. 9. 永久、永続革命 5. 共産主義での規律はより厳格。「人民の能力や思想の向上は期待薄」と認識? 6. 社会主義初級段階論の原型? 7. マルクス・レーニン主義とは? 8. 修正主義打倒のための闘争
	1. 現段階の中国社会にはどのような階級が存在するのか。地主階級とブルジョアジーの上層部分が中国社会の統治階級である。一方では、プロレタリアート、農民階級、農民以外の様々なブルジョアジーが存在する。この三つの階級が、今日の中国の最も広い領土における被統治階級である。(中略)。新民主主義革命は社会主義革命とは異なり、中国における帝国主義と漢奸反動派の統治を転覆させるだけであり、引き続き反帝反封建に参加できる資本主義成分を破壊するものではない。(中略)。中国革命はブルジョア民主主義的性質の革命(新民主主義的革命)とプロレタリアートの社会主義的性質の革命、現段階の革命と将来段階の革命という二つの任務の革命を含むものである。 2. 資本主義は社会主義に進み、社会主義は共産主義に進む。共産主義社会もやはり転化するのであり、きつと、階級にわかれるであろう。 3. 階級はやはり存在しているのだ。今では階級は存在しなくなった、今では、階級闘争はもう消滅してしまったと主張する観点は恐らく正しくないであろう。 4. 反動階級の残存(勢力)については、決してこれを軽視してはならず、ひきつづき、かれらと闘わねばならない。すでに覆された反動階級はなお復活を企図している。社会主義社会では、なお新しいブルジョア分子が生まれることがありうる。社会主義の段階全体にわたって、階級と階級闘争が存在しており、この階級闘争は長期にわたる複雑な者であり、時には、非常に激烈なものでさえある。 5. 資本主義から共産主義に移行する全歴史において(この期間は数十年、あるいはもっと長い時間)、プロレタリアートとブルジョアジーの間の階級闘争が存在し、社会主義と資本主義という二つの道の闘争がある。 6. 不純は絶対的であり、純粋は相対的である。これが対立物の統一である。床をくとする。一日中、夜まで24時間はいても、やはり灰やちりあくたがある。考えてもみたまえ、いつかわが党が純粋だった年があるだろうか。 7. 階級所属と本人の態度とは区別しなければならず、本人の態度が主である。階級を区分するのは主として悪質な分子を追いつぐためである。 8. 文化大革命では何をやるのか？ 階級闘争である。	1. 1939年12月。『毛沢東選集 第二巻』、601～614頁 2. 1958年3月20日。『毛沢東思想 万歳(上)』、231頁。『建国以来毛沢東文稿 第十二冊』、255頁 3. 1958年9月5日。『毛沢東思想 万歳(上)』、311頁。『建国以来毛沢東文稿 第十三冊』、43頁 4. 1962年1月30日。『毛沢東思想 万歳(下)』、22頁。『建国以来毛沢東文稿 第十六冊』、218頁 5. 1962年9月27日。『建国以来毛沢東文稿 第十六冊』、414頁 6. 1964年6月16日。『毛沢東思想 万歳(下)』、146頁。『建国以来毛沢東文稿 第十七冊』、264頁 7. 年月日不詳。『毛沢東思想 万歳(下)』、274頁 8. 1975年10月～1976年1月。『建国以来毛沢東文稿 第二十冊』、450頁	1. 二段階革命論(二段階階級闘争論) 2. 3. 5. 社会主義においても階級と階級闘争は存在 4. 社会主義でも新たなブルジョアジーが生まれる可能性 6. 党内は常に不純 7. 階級区分の基準は思想 その他(マルクスの学説の核心は階級闘争。『国家と革命』、66頁)

指導者	1. 個人崇拜には二種類あり、その一つは正しいものであり、たとえば、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの正しいものについては、われわれは崇拜しなければならず、永遠に崇拜しなければならない。(中略)。もう一つは誤った崇拜である。(中略)。個人崇拜反対の目的にも二種類ある。その一つはあやまった崇拜に反対することであり、もう一つはほかの人を崇拜することに反対し、自分を崇拜することを要求することである。問題は個人崇拜にあるのではなく、真理があるか否かにある。真理であるなら崇拜しなければならず、真理でないなら、たとえ集団指導であってもやはり崇拜してはいけない。 2. 「技術がすべてを決定する」-政治はどうなるのだ? 「幹部がすべてを決定する」-大衆はどうなるのだ? ここには弁証法が欠けている。スターリンは弁証法について理解している時もあったが、理解していない時もあった。 3. (毛沢東思想の絶対的権威、について) 権威或いは威信は闘争の実践をつうじて自然にうち立てることしかできないのであり、人為的にうち立てることはできない。こうしてうち立てられた威信は、必ずずれてしまうだろう。	1. 1958年3月10日。『毛沢東思想 万歳(上)』、221～222頁。『建国以来毛沢東文稿 第十二冊』、253頁 2. 1958年5月17日。『毛沢東思想 万歳(上)』、277頁。『建国以来毛沢東文稿 第十二冊』、346頁 3. 1967年12月17日。『毛沢東思想 万歳(下)』、406頁。『建国以来毛沢東文稿 第十九冊』、203頁	1. 個人崇拜を肯定(習は、毛ほどは露骨ではないが、黙認) 2. 弁証法(政治と経済、大衆と幹部) 3. 習近平の「威信」は必ず崩れ去る?
	○人民大衆 1. いわゆる人民大衆には、労働者階級、農民階級、都市のプチブルジョアジー、帝国主義と国民党反動政権及びそれを代表する官僚ブルジョアジー(大資産階級)、そして地主階級によって圧迫され、損害を被る民族ブルジョアジーが含まれる。 2. 我々の路線、我々の綱領は、ひと言で概括すると、「プロレタリアートが指導する人民大衆の反帝反封建革命」である。(中略)。人民大衆の最も主要な部分は農民であり、その次がプチブルジョアジー、さらにはその他の民主分子が含まれる。 3. いわゆる人民大衆とは、帝国主義、封建主義、官僚資本主義によって圧迫され、損害を被り、或いは制限される一切の人々のことであり、1947年10月の中国人民解放軍宣言において明確に指摘された労働者、農民、兵士、学生、商人およびその他あらゆる愛国人士のことでもある。 ○人民(「敵」に対する「人民」) 1. 共産党というような革命党がないのに、人民が敵の圧迫をひっくり返すなどは、まったく不可能なことである。我々は共産党である、我々は人民を指導して敵を打倒しなければならない。 2. 人民とは何か? 中国において、現段階においては労働者階級、農民階級、都市のプチブルジョアジー及び民族ブルジョアジーである。 3. 労働者・農民・都市小ブルジョア分子・国を愛する知識分子・国を愛する資本家及びその他の国を愛する人々、これらの人々は全人口の95%以上を占めている。これらの人々は、われわれの人民民主独裁の下では、すべて人民の範疇に属している。 ○大衆(「幹部」に対する「群衆」) 1. 革命政治家は、千万という大衆政治家の指導者に過ぎない。彼らの任務は、大衆政治家の意見を集約、精練し、これを大衆の中に戻し、大衆に受け入れさせ、実践させることである。門を閉じて車をつくったり、聡明なふりをしてはならない。 2. もし、広範な大衆の積極性しかなく、有力な中心的指導者に当該地で適切に大衆を組織する積極性がなければ、大衆の積極性は長くは続かず、正確な方向に進み、レベルアップすることもできない。(中略)。指導者は、指導の中核となるよう、少数の積極分子と上手に団結しなければならない。(中略)。指導僧侶と広大な大衆を結合させる方法をとらなければならない。 3. 根拠地では民主主義を実行したが、第一に、金がなく、第二に、食糧がなく、第三に、銃砲がなく、第四に、孤立無援だったので、ほかにやりようがなく、大衆に依頼しなければならなかったのだ。 4. (原則には) 大体、次のような数項目がある。教育と労働を結びつけることが一つ。党が指導することが一つ。それにも一つ、大衆路線がある。 5. 「四清」、「五反」はいずれも大衆がわれわれに教えてくれたものである。 6. 「人」が「人権」を賦与するのではないか。われわれのもっている権利は天が賦与してくれたものなのか? われわれの権利は大衆が授けてくれたものであり、まず第一に、労働者階級と貧農・下層中農が授けてくれたものである。	○人民大衆 1. 1948年1月18日。『毛沢東選集 第四巻』、1167頁 2. 1945年4月24日。『毛沢東文集 第三巻』、304～305頁 3. 1948年3月1日。『毛沢東選集 第四巻』、1182頁 ○人民 1. 1942年2月1日。『毛沢東選集 第三巻』、769頁 2. 1949年6月30日。『毛沢東選集 第四巻』、1364頁 3. 1962年1月30日。『毛沢東思想 万歳(下)』、23頁。『建国以来毛沢東文稿 第十六冊』、219頁 ○大衆 1. 1942年5月23日。『毛沢東選集 第三巻』、823頁 2. 1943年6月1日。同上、853～854頁 3. 1958年4月6日。『毛沢東思想 万歳(上)』、250頁 4. 1958年9月9日。同上、325頁。『建国以来毛沢東文稿 第十三冊』、55頁。 5. 1964年3月。『毛沢東思想 万歳(下)』、106頁。 6. 1965年12月21日。同上、307頁。	○人民大衆 1. 「人民大衆」という特異な概念 2. プチブルである農民を「人民大衆の中核」とするのは、当時の政治的必要性ゆえ ○人民 1. 共産党に指導される、受け身の存在としての人民(「主体性をもつ者は人民でなし」) 2. 3. 「人民」の定義 ○大衆 1. 2. 革命政治家(幹部党員、指導者)-大衆政治家(一般党員)-大衆という「上下関係」(習:指導的立場にある幹部の役割重視) 3. 大衆依拠路線は苦肉の策

労働者、 プロレタリアート	1. 工業プロレタリアートは数は少ないが(200万)、民族革命運動の主力である。 2. 中国革命は、もしプロレタリアートの指導がなければ、当然勝利できない。 3. いわゆる新民主主義革命とは、プロレタリアート指導下の、人民大衆による反帝国主義反封建の革命である。 4. 我々の経験を総括すれば、一点に集中する。すなわち、労働者階級が(共産党を通じて)指導し、労働者農民連盟を基礎とした人民民主独裁である。 5. 中国革命の指導問題についていえば、過去であろうと今後であろうと、いずれにおいても労働者階級が(その先鋒隊である中国共産党を通じて)指導すると言えるのみであって、二度と半労働者階級が含まれるなどしてはならない。 6. 社会主義理論が誕生したのは、知識分子が、すでに存在する階級闘争の諸現象を研究して理論にまで高め、これを宣伝し、労働者階級をばらばらのものから、組織あるものに変え、自然発生的な階級から自覚した階級に変えていくことによってである。労働者階級は毎日、搾取と圧迫の下で生活し、働いており、飯のために、ひどく忙殺されており、自分ではマルクス主義を生み出しきれなかった。	1. 1926年2月1日。『毛沢東集 第一巻初期』、170頁 2. 1939年12月。『毛沢東選集 第二巻』、608頁 3. 同上、610頁 4. 1949年6月30日。『毛沢東選集 第四巻』、1369頁 5. 1951年12月15日。『建国以来毛沢東文稿 第五冊』、236頁 6. 年月日不詳。『毛沢東思想 万歳(下)』、275頁	2, 3, 5. 革命にはプロレタリアートによる指導が必須 4. 農民は同盟の対象 6. 労働者階級の限界、それを埋めるために必要な知識分子(ブルジョア社会内で成長する、訓練され、教育を受けたプロレタリアート)
	1. 農民問題は国民革命の中心の問題であり、農民が立ち上がり国民革命を擁護しなければ、国民革命は成功しない。(中略)。進歩的な労働者階級がとりわけ一切の革命階級の指導者であるが、農民が郷村で立ち上がり、家父長制的封建的地主階級の特権を打倒しないのであれば、軍閥と帝国主義勢力が根本から倒れることはない。 2. 農民には自発性と盲目性がある。 3. 数多の王朝の交代は、農民一揆の力があつたから成功したのである。(中略)。中国史における農民一揆と農民戦争の規模の大きさは、世界史において他に類をみない。中国封建社会においては、こうした農民の階級闘争、農民の一揆、そして農民の戦争こそが、歴史発展の真の動力である。 4. 農民以外のプチブルには、広大な知識分子、小商人、手工業者及び自由職業者が含まれる。 5. 中国の革命は実質的には農民革命である。 6. 革命は農民の援助によって勝利を収めた。国家の工業化も農民の援助によってのみ成功することから、労働者階級は土地改革を積極的に手助けしなければならない。 7. 農民には自発性と盲目性がある(1935.10にも同様の発言あり)。(中略)。土地分配のメリットを一部の農民は既に忘れ始めている。我々は今まさに個人経済から社会主義への過渡期にある。我々の経済の主体は国有経済であり、それには両翼がある。一つは国家資本主義(個人資本主義に対する改造)であり、もう一つは互助合作、食糧買付(農民に対する改造)である。 8. 農村では、公社を基礎とする所有制を実行し、私有を国有とし、全国に新しい都市と大工業を配置し、全国の交通運輸がすべて現代化し、経済状況が真に全面的に改められて初めて、農民の世界観が一步一步、やがて完全に変革できるのである。 9. 全人民所有制と集団所有制との矛盾は、事実上労働者と農民の矛盾である。 10. 農民と全国人民は、国家が「金をもうけたときあるいは失ったとき」にどうするかを理解すれば、賛成はしても反対はしない。(中略)。レーニン・スターリンは「社会主義建設期に農民は国家に貢献が必要がある」といったことがある。わが国の大多数の農民は積極的に「貢」いでおり、富裕中農のなかの15パーセントだけが喜ばず、大躍進・人民公社に反対する。 11. 集団所有制を社会主義の全人民所有制に変えるというのは、農業の生産手段をすべて国有化し、農民をすべて労働者にし、国家が統一的に賃金を支給する制度である。	1. 1926年9月1日。『毛沢東集 第一巻初期』、175頁、177頁 2. 1935年10月2日。『毛沢東文集 第六巻』、295頁 3. 1939年12月。『毛沢東選集 第二巻』、586～588頁 4. 同上、603頁 5. 1940年1月。同上、652頁 6. 1950年6月23日。『毛沢東選集 第五巻』、26頁 7. 1953年10月2日。『建国以来毛沢東文稿 第八冊』、470頁 8. 1959年12月～1960年2月。『毛沢東 政治経済学を語る』、16頁 9. 同上、31頁 10. 同上、87～88頁 11. 同上、118頁	1. 農民の立ち上がりは必須だが、指導的立場にあるのは労働者階級 3. 階級性というよりも、中国の農民がもつエネルギーそのものを評価 4. 農民はプチブル(農民に対する不信任。『毛沢東の秘められた講話 下』、160頁) 5. 中国革命は農民革命 6. 革命の主体は農民ではない(必要なのは農民の協力) 7, 8. 農民工作の困難さ 9. 労働者と農民の間には矛盾が存在 (毛、習：農民を軽視(主体にはなりえない)、重視する(その力は歴史を動かさうので、組織化せず))

知識人、 学生	1. 農民以外のプチブルには、広大な知識分子、小商人、手工業者及び自由職業者が含まれる(農民4と同じ)。 2. 大学生のうちの相当な部分に、私は疑いを抱いています。特に文科系の人間に疑いを抱いています。 3. もとは、知識分子のなかから何ほどの後継者を養成しようと思っていましたが、今から見ると、ひどく非現実的なことでした。 4. 半年間軍隊におれば、すべてのお手本どおりにやれる。さらに、一年間農民になり二年間労働者になるのだ。それが本当の大学だよ。 5. 社会主義理論が誕生したのは、知識分子が、すでに存在する階級闘争の諸現象を研究して理論にまで高め、これを宣伝し、労働者階級をばらばらのものから、組織あるものに変え、自然発生的な階級から自覚した階級に変えていくことによってである。労働者階級は毎日、搾取と圧迫の下で生活し、働いており、飯のために、ひどく忙殺されており、自分ではマルクス主義を生み出しきれなかった(労働者6と同じ)。	1. 1939年12月。『毛沢東選集 第二巻』、603頁 2. 1967年2月3日。『毛沢東思想 万歳(下)』、375頁(類似の発言、418頁) 3. 1967年5月1日。同上、390頁 4. 1968年7月28日。同上、417頁 5. 年月日不詳。同上、275頁	1～4. 知識人や大学生に対する不信任 5. 知識分子をある程度評価
	1. われわれの規律は、多くはソ連からもちこんだものであり、厳しすぎると、人々をしばることになる。そんなふうでは、官僚主義を打ち破れなくなる。(中略)。各地は権限を分担しなければならず、独立性を主張するものだとわれわれのをごわがる必要はなく、中央がまだ決定を下していないのだから、いずれも、論じてかまわないのである。 2. 地方には、中央の各部が地方にあたえた、通用しない、実際に合致しないすべての主観主義的な命令、指示、訓令、表式をボイコットする権限があり、一部のものについてはもっと強くこれを阻止してもかまわない。この権限は省・市委員会(政治的に、比較的成熟している)だけに与えることとし、地区委員会・県委員会には与えないものとする。 3. 各生産単位、各個人には、すべて主動性がなければならない、一定の独立性がなければならない、統一性と結びついた独立性がなければならない。(中略)。現状からみて、おそらく地方の権限を少し拡大することが必要だろう。(中略)。中央の政策にそまかぬ限り、法律の定める範囲内で、状況が要求し、活動が要求すれば、地方でも若干の規則や条例を決めることができる。この点では、憲法は拘束していない。 4. 省委員会書記、県委員会書記は(中央)各部の見方については、それがないかの如く(無視して)、工場や合作社に深く入りなさい。ほんとうの知恵は工場、合作社、商店、学校から生まれるもので、上のほうへ行けば行くほど、真の知識となるものは存在しないのである。 5. 省・地区・県・人民公社・生産隊・生産小隊の各級の同志諸君。(中略)。請負生産は、どうしても、しっかりと実際に即していなければならない。上級のきめた、あの一連の指示に全然こだわるには及ばない。これらの指示にこだわる必要はなく、現実の可能性だけを問題にせよ。 6. レーニンは「真に民主的な意味を持つ集中制とは、地方の創造性・自発的精神で総目標に至る道・方式・方法を十分・順調に発展させることである」といつている。そのとおりである。大衆は道を創造できるのであって、ロシアのソビエトは大衆の創造したものであり、わが人民公社も大衆の創造したものである。 7. 1958年、一部の基本建設単位では投資請負い制を実行し、この単位の積極性を大いに発揮した。中央は自己の積極性に依拠してはならず、企業・地方の積極性を発揮させなければならない。 8. 個々の、うまくゆかず、腐って、墮落して変質していて、助けることができないか、またはあまりにひどく腐っている場合には、工作隊を派遣して、かれらに代わって遂行させねばならないが、そのほかは、かれら(自身)が遂行するよう誠心誠意、援助しなければならない。 9. 要するに大衆に頼らねばならず、工作隊に頼ってはならないのである。 10. 私はこれまで、一般に中央諸機関が悪事をしでかしたら、地方が謀反をよびかけ、中央に攻撃をかけねばならぬと主張してきた。	1. 1956年4月。『毛沢東思想 万歳(上)』、61～62頁 2. 同上、64頁 3. 同上、76頁、78頁。『建国以来毛沢東文稿 第十一冊』、1頁 4. 1957年1月。『毛沢東思想 万歳(上)』、115頁 5. 1959年4月29日。同上、396～397頁。『建国以来毛沢東文稿 第十四冊』、55頁 6. 1959年12月～1960年2月。『毛沢東 政治経済学を語る』、146頁 7. 同上、59頁。『毛沢東文集 第八巻』、126頁 8. 1963年5月。『毛沢東思想 万歳(下)』、62頁 9. 1965年1月3日。同上、290頁。 10. 1966年3月28日。同上、332頁。『建国以来毛沢東文稿 第十八冊』、237頁	1. ソ連とは異なる道を意識、地方の独立性を強調 2. 地方には中央の決定を否定できる権限あり 3, 5. 基層には一定の主動性と独立性あり 4. 真の知識は基層にあり 5, 7. 対中央という点では、請負制も奨励 6. レーニンも地方の創造性と自発的精神を称賛 8, 9. 毛沢東も工作隊の派遣を一定程度肯定 10. 地方の「謀反」も了承

官僚主義、 官僚制度	1. われわれは各省が各種の生産をできるだけ発展させることを望む。(中略)。わが国は秦以来大国を形成し、長らく全国をおよそ統一してきたが、欠点の一つは官僚主義で統制がひどすぎ、地方は独立して発展できず、みなが足をひっぱりあったので、経済の発展はおそかった。(中略)。われわれは全国を統一しなければならないが、各省は独立しており、相対的統一・相対的独立である(「中央に対する地方」と共有)。 2. 官僚主義者階級と労働者階級、貧下中農は鋭く対立する二つの階級である。	1. 1959年12月～1960年2月。『毛沢東 政治経済学を語る』、119～120頁 2. 1964年12月12日? 1965年1月15日? 『建国以来毛沢東文稿 第十七冊』、467頁	1. 官僚制度が不要なのは、その「統制によって、地方独自の発展が妨げられる」からの発想。地方の「独立」こそを重視。もともと、建国当初は中央集権主義的(『国家と革命』、100頁。『毛沢東の秘められた講話』下、106頁、『毛沢東選集 第五巻』、95頁。習近平は、「万能の中央政府による集権、指導者の意志が貫徹できる官僚制度によって、地方独自の発展を促す」との発想?) 2. 官僚主義者を「階級」視するほどに嫌悪
後進性	レーニンは「後進的な国ほど資本主義から社会主義への移行はより困難である」といったが、これはいまからみると正しくない。実は経済が後進的であるほど、資本主義から社会主義への移行は容易なのであって困難なのではない。人間は貧しければそれだけ革命をやろうとする。	1959年12月～1960年2月。『毛沢東 政治経済学を語る』、26頁	後進的であるほど革命的
自力更生	国と国との関係に関し、我々は、各国ができる限り多くを行い、自力更生を行い、外国からの援助に頼らないことを原則とするよう主張している。(中略)。生存を外国に頼るのは極めて危険であり、戦争になるとより危険である。	1959年12月～1960年2月。『毛沢東文集 第八巻』、128～129頁	経済合理性、比較優位否定の可能性
民主党派	すべての民主党派と無党派民主人士は中国共産党の指導を受け入れると表明しているが、彼らのうちの多くの者が実際には、程度の違いはあるが反対派である。	1956年4月25日。『毛沢東選集 第五巻』、279頁	民主党派に対する強い不信
法律	1. 世の中にある多くの新しく正しいものは、常に違法なものだった。我々はかつて違法だった。 2. 法律に依拠して多数の人を治めてはならない。良い習慣を身につけることに依拠し、多数の人を治めねばならない。	1. 1953年11月4日。『毛沢東選集 第五巻』、122～123頁 2. 1958年8月21日。『毛沢東の秘められた講話 下』、123頁	1. 違法から正義が生まれる 2. 法律よりも習慣重視

おわりに

毛沢東の思想(毛沢東思想)の基礎をなすものがマルクス・レーニン主義だけでないことは言うを俟たない⁷¹⁾。したがって、毛沢東とその思想を包括的に論ずるには多方面にわたる学際的な営みが求められる。

本論では、マルクス・レーニン主義、とりわけ、レーニン主義が毛沢東の思想形成に与えた影響に焦点を絞って議論を進めてきた。これまで検討してきたように、毛沢東は、レーニンが唱えた前衛党理論と、自身の思想の最大の特徴である「矛盾の絶対視」を掲げて政治を展開した。しかし、毛は、それぞれに秘められた、中国の歴史に新たなページを刻みうるダイナミズムを顧みなかったため、建国後の中国社会をしばしば混乱に陥れた。永久革命を説き、国家(と党)の消滅を展望する毛沢東にとって、国家というものは常にその姿(対内及び対外的役割)を変化させるものであり、したがって、毛には「理想的な国家像」や「あるべき国家像」のようなものは本質的に存在しなかったと言えるのではないか。

「はじめに」で述べたように、筆者の次の課題は、習近平の言動にみられる毛沢東思想の影響を明らかにすることにある。

毛沢東思想の影響は、改革開放期の党指導者においてもうかがわれる。例えば、毛沢東は1959年末から1960年初めの時期に、このようなことを言っている。「社会主義という段階は、二つの段階に分けることが可能である。第一段階は発達していない社会主義で、第二段階は比較的発達した社会主義である。第二段階に要する時間は第一段階よりも長いかも知れない。第二段階を経て、物質的生産と精神的財産が極めて豊かになり、人々の共産主義的認識が極めて高まった段階になると、共産主義社会に入ることができる」⁷²⁾。これは、1987年の党大会で趙紫陽が提起した「社会主義初級段階論」の原型と言えるのかもしれない。

「闘争精神の発揚を堅持する。全党全国各民族人民の意気込み、気概、自信を強化し、邪悪なことを信用せず、根拠のない惧れを抱かず、压力を恐れず、困難であっても前進し、そして困難に立ち向かい、発展と安全が実現するよう総合的かつ怠ることなく準備を進め、進みゆく道に横たわる様々な困難と挑戦を全力を尽くして克服し、力強い闘争に依ってやるべきことをやり、新たな天地を切り開く」⁷³。今後の筆者の考察対象である習近平の発言には強烈な「闘争」志向がしばしばうかがわれる。こうした傾向は、「中国は平和を愛するという人がいますが、それはホラで、実際は闘うことを好むのです。私もその一人です。戦うことを好めば、修正主義が出現するのは、そんなに容易ではないでしょう」⁷⁴とする毛沢東の発言を意識しているからなのかもしれない。

自らに権力を集中させるための制度構築を巧妙に行い、腐敗を理由に異論者をパージし、後継者を育成しない。インターネットを活用し、黨員らに自らの考え（いわゆる習近平思想）を半ば強制的に学習させる。こうした手法により、習近平中国は「21世紀の新しい全体主義国家」になってしまったのかも知れない。もっとも、矛盾ではなく「安定」を絶対視する習近平政治は、毛沢東政治と大きく異なる⁷⁵。

「権威或いは威信というものは、闘争の実践をつうじて自然にうち立てることしかできないのであり、人為的にうち立てることはできない。人為的にうち立てられた威信などは、必ず崩れてしまうだろう」⁷⁶。習近平の思想と実践を検証することで、毛沢東のこの「予言」が習にあてはまるか否かについても、一定の結論を出せるのかも知れない。

注：

- 1 「联防联控機制綜合組發布通知 進一步優化落實新冠肺炎疫情防控措施」『人民日報』2022年12月8日。
- 2 拙稿「ダイナミック・ゼロ政策の導入と放棄、そして、強靱な社会 —『試論：習近平と人民』に向けて」静岡県立大学国際関係学部『国際関係・比較文化研究』第22巻第1号、2023年、111～131頁。中国社会の安定は、人民にみられる「主体的な被統治性向」の存在によってもたらされていると筆者は考えるが、この点の考察は別稿にゆずる。
- 3 西川佳秀「毛沢東思想から習近平の世界戦略を読み解く」。https://ippjapan.org/archives/7892（2025年1月8日最終アクセス）。
- 4 筆者は、党や指導者が「人民大衆」という場合の「人民」と「大衆」（「群衆」）の違いと関連性を以下のように考える。毛沢東によると、「人民」とは「現段階においては労働者階級、農民階級、都市のプロレタリア階級及び民族プロレタリア階級」である（『論人民民主專政』中共中央毛沢東選集出版委員会編『毛沢東選集 第四卷』人民出版社、1970年、1364頁）。一方で、毛は、「人民大衆」とは「労働者階級、農民階級、都市のプロレタリア階級、帝国主義と国民党反動政權及びそれを代表する官僚プロレタリア階級（大資産階級）、そして地主階級によって圧迫され、損害を被る民族プロレタリア階級」だとする（『關於目前党的政策中的幾個重要問題』、同上、1167頁）。つまり、「人民」と「大衆」が包摂する対象は一致しているのである。そのうえで、筆者は、一般的に「党によって指導される」側面を強調したい、或いは対義語である「敵」の存在を意識して用いたい場合、指導者やメディアはこれらの人々を「人民」と呼び、それに該当しない場合、すなわち、「日常を生きる人々」、或いは「非黨員」であることを強調したい時には「大衆」と呼ぶといった使い分けを行っていると理解している。なお、「人民」と「敵」の二項対立的整理については、和田英男「国家構成員に関する中国共産党の概念についての通時的考察 —『人民』を中心に」中国現代史研究会『現代中国研究』第45号、2020年、35頁参照。ちなみに、個人の政治的バックグラウンドを規定する「政治面貌代碼」によると、「群衆」以外は中国共産黨員等の「黨員」である。https://baike.baidu.com/item/%E6%94%BF%E6%B2%BB%E9%9D%A2%E8%B2%8C/9734380?fr=ge_ala（2025年1月3日最終アクセス）。
- 5 「關於建国以来党的若干歷史問題的決議」（1981年6月27日採択）。
- 6 徳田教之によると、毛沢東思想とは「毛自身の思想そのものではないより大きな内容を含んだ党の公式のイデオロギー」であり、「誇張された速成の（党の）神話」である。『毛沢東主義の政治力学』慶應通信、1977年、114～115頁。鈴木隆は、「カッコの有無」によって毛沢東思想と「毛沢東思想」を区別している。『習近平研究 支配体制と指導者の実像』東京大学出版会、2025年、290～291頁。なお、中央党

- 校のあるテキストは、毛沢東の「誤り」を以下の三点に要約している。「1. 階級闘争を強調し、階級闘争を要とし、生産力の発展を顧みなかった。2. 経済建設面で成果を上げるのを急ぎ、所有制改革面で私有制消滅を急ぎ、できる限り早く全民所有制へ移行しようとした。3. 彼自らが主張した实事求是の思想路線に背いた」（本書編写組『毛沢東思想基本問題 第二稿』中共中央党校出版社、2000年、223頁）。
- 7 龔育之、逢先知、石仲泉著『毛沢東の読書生活』生活・読書・新知三聯書店、1986年、23頁。スチュアート・R・シュラム著、北村稔訳『毛沢東の思想[～1949年 1949～76年]』蒼蒼社、1989年。D・ヴォルコゴノフ著、生田真司訳『七人の首領① レーニンからゴルバチョフまで』朝日新聞社、1997年、72～73頁、157～159頁、182頁、218頁。スターリンの強い影響を指摘する先行研究としては、前出の徳田、石川禎浩『中国共産党、その百年』（筑摩書房、2021年）、高橋伸夫『中国共産党の歴史』（慶應義塾大学出版会、2021年）などがある。筆者は、毛沢東に対するスターリンの影響は、レーニン主義に見られる一部の要素（党内路線闘争、階級闘争、指導者の役割）の絶対視、その拡大解釈に「とどまる」と考える。
 - 8 レーニン著、角田安正訳『国家と革命』講談社学術文庫2090、2021年、66頁。
 - 9 「中国革命和中国共産党」中共中央毛沢東選集出版委員会編『毛沢東選集 第二巻』1969年、601頁。
 - 10 レーニン著、朝野勉訳『共産主義における「左翼」小児病』大月書店、1970年、40頁。
 - 11 前出、『毛沢東選集 第二巻』、611頁、614頁。
 - 12 中兼和津次「空想から現実へ - マルクス、レーニン、スターリン、毛沢東、鄧小平に見られる社会主義像の変遷 -」比較経済体制学会『比較経済研究』第55巻第2号、2018年、92頁。本稿執筆にあたり、筆者は、同氏の研究成果から多くの示唆を得た。
 - 13 中共中央毛沢東選集出版委員会編『毛沢東選集 第一巻』人民出版社、1970年、277頁。
 - 14 レーニン著、高橋啓吉訳『「人民の友」とはなにか<第一分冊>／弁証法の問題によせて』新日本出版社、2002年、147頁。前出、『毛沢東選集 第一巻』、306頁。
 - 15 「国交正常化から30年 新世紀の中日関係を築くために」。http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/30year/teji.htm（2024年11月29日最終アクセス）。
 - 16 前出、シュラム、19頁。
 - 17 前出、『国家と革命』、53頁。
 - 18 「在拡大的中央工作会議上の講話」中共中央党史和文献研究院編『建国以来毛沢東文稿 第十六冊』中央文献出版社、2023年、218頁。
 - 19 E.H.カー著、塩川伸明訳『ロシア革命 レーニンからスターリンへ 1917-1929年』岩波現代文庫、2000年、270頁。

- 20 前出、『毛沢東選集 第二巻』、598頁。「新民主主義論」、同、652頁。
- 21 「国民革命与農民運動」『毛沢東集 第一巻初期』、175頁、177頁。
- 22 前出、シュラム、132頁、218頁。ちなみに、シュラムは分裂期を1968年10月の8期10中全会からとしている。本論筆者は、分裂と言える状態は農業集団化の加速から反右派闘争開始に至る1950年代後半に起点を置いている。
- 23 前出、徳田、173～174頁。
- 24 「事情正在起变化」中共中央党史和文献研究院編『建国以来毛沢東文献 第十一巻』中央文献出版社、2023年、410～411頁。
- 25 「対西藏地区武装叛乱情勢の批語」中共中央党史和文献研究院編『建国以来毛沢東文献 第十三巻』中央文献出版社、2023年、402頁。
- 26 中嶋嶺雄『増補 現代中国論』青木書店、1978年、57頁。
- 27 「右翼化に反対し、保守に反対することについての講話」東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳（上）』三一書房、1976年、50頁。
- 28 アンドリュウ・G・ウォルダー著、谷川真一訳『脱線した革命 毛沢東時代の中国』ミネルヴァ書房、2024年、239頁。
- 29 シュラムはその著書の中で、アンガス・グラハムが指摘する晩年の毛沢東にみられる老荘哲学の影響について紹介している。前出、190頁。
- 30 「毛遠新との談話」東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳（下）』三一書房、1976年、96頁。
- 31 「成都会議での講話」、前出、『毛沢東思想万歳（上）』、238頁。
- 32 矢吹晋訳『毛沢東 政治経済学を語る ソ連《政治経済学》読書ノート』現代評論社、1974年、42頁。
- 33 前出、『毛沢東思想万歳（上）』、231頁。
- 34 同上、234頁。
- 35 前出、『毛沢東選集 第一巻』、281頁。
- 36 前出、シュラム、224頁。
- 37 菊地昌典「第一章 社会主義社会と階級闘争」菊地昌典編『講座 マルクス主義 10』日本評論社、1969年、27～35頁。
- 38 前出、『建国以来毛沢東文稿 第十六冊』、227頁。
- 39 前出、『毛沢東思想万歳（上）』、234頁。
- 40 同上、221～222頁。
- 41 「第一回鄭州会議での講話」ロデリック・マックファーカー＋ティモシー・チーク＋ユージン・ウー編、徳田教之＋小山三郎＋鐙屋一訳『毛沢東の秘められた講話 下』岩波書店、1993年、160～161頁。
- 42 1980年に発表されたいわゆる「庚申改革案」（「歴史的経験と我們的発展道路」）の中で、廖蓋隆は農会を設けるよう提案している。

- 43 前出、レーニン、『国家と革命』、21頁。
- 44 前出、矢吹、14頁。
- 45 同上、115頁。
- 46 拙稿「ミッソングダムの今」<https://ksuwa.com/p9.html>。
- 47 菊地によると、スターリンの場合、資本主義国や侵略国の包囲認識が軍備力強化、重工業偏重政策につななかった。前出、33頁。
- 48 前出、『毛沢東選集 第一巻』、259～273頁。
- 49 同上、300頁。
- 50 エンゲルス著、大内兵衛訳『空想より科学へ—社会主義の発展』岩波文庫34-128-7、2024年、61頁。
- 51 「農村の人民公社設立についての中共中央の決議」日本国際問題研究所現代中国研究部会編『中国大躍進政策の展開 資料と解説 上巻』日本国際問題研究所、1973年、246～247頁。
- 52 1957年7月時点では、毛沢東は社会的生産力の発展を依然として優先視しており、上部構造の变革を優先するといった考え方は見て取れない。「一九五七年夏季の形勢」中共中央党史和文献研究院編『建国以来毛沢東文稿 第十一巻』中央文献出版社、2023年、492頁。
- 53 前出の歴史決議によると、「毛沢東思想の生きた魂には实事求是、大衆路線、独立自主という三つの基本的側面がある」。
- 54 「關於領導方法的若干問題」中共中央毛沢東選集出版委員会編『毛沢東選集 第三巻』人民出版社、1970年、854頁。
- 55 「漢口會議での講話」、前出、『毛沢東思想万歳（上）』、250頁。
- 56 「整頓党的作風」、前出、『毛沢東選集 第三巻』、769頁。前出、シュラム117頁、133頁。
- 57 「關於目前党的政策中的幾個重要問題」、前出、『毛沢東選集 第四巻』、1167頁。
- 58 中共中央党史和文献研究院編『毛沢東年譜 第六巻』中央文献出版社、2023年、34頁。
- 59 毛沢東は「官僚主義者階級」という表現を使ったことがある。これは、官僚主義に対する毛沢東の強い敵対意識を示す事例といえよう。「対陳正人關於社教点情況報告的批語和批注」中共中央党史和文献研究院編『建国以来毛沢東文稿 第十七巻』中央文献出版社、2023年、467頁。
- 60 前出、中兼、2021年、226頁。
- 61 「反对党内的資産階級思想」中共中央毛沢東主席著作編纂出版委員会編『毛沢東選集 第五巻』人民出版社、1977年、95頁。前出、レーニン、『国家と革命』、100頁。
- 62 前出、シュラム、141頁、147頁。
- 63 前出、矢吹、119～120頁。

- 64 「中央政治局拡大会議での講話」、前出、『毛沢東思想万歳（上）』、64頁。
- 65 「北戴河會議での講話（記録稿）」、前出、ロデリック・マックファーカーク他著、123頁。
- 66 「關於農業互助合作的兩次談話」、前出、『毛沢東選集 第五巻』、122頁。
- 67 前出、ロデリック・マックファーカーク他著、113～114頁。
- 68 同上、106頁。
- 69 中兼和津次『毛沢東論 真理は天から降ってくる』名古屋大学出版会、2021年、234頁。シュラムは、「主観と客観の相互作用」を評価している。前出、80頁。
- 70 前出、矢吹、26頁。
- 71 逢先知著、竹内実/浅野純一訳『毛沢東の読書生活 秘書がみた思想の源泉』サイマル出版会、1995年、34～58頁。梶谷懐「中国共産党は人民の不在にどう向き合うのか」日本現代中国学会『現代中国』96号、2022年、26頁。
- 72 「読蘇聯《政治経済学教科書》的談話（節選）」中共中央文献研究室編『毛沢東文集 第八巻』人民出版社、1999年、116頁。
- 73 2022年10月16日、中国共産党第20回全国党代表大会開幕式における習近平報告「高举中国特色社会主义偉大旗幟 為全面建設社会主义現代化国家而团结奮闘」『人民日報』2022年10月26日。
- 74 「カボ、バルク同志との談話」、前出、『毛沢東思想万歳（下）』、376頁。
- 75 鈴木隆「毛沢東の『闘い』の哲学」大東文化大学東洋研究所編『東洋学へのいざない（2023）』20頁。
- 76 「対大樹特樹絶対權威的提法等批語」中共中央党史和文献研究院編『建国以来毛沢東文稿 第十九巻』中央文献出版社、2023年、203頁。